

新羅古瓦についての覚書

—ひろたコレクションの資料調査を通して—

高 正 龍

1. はじめに

廣田長三郎氏編『古瓦図考』には、百点余りの朝鮮半島の瓦が紹介されている⁽¹⁾。それらの多くは新羅瓦に分類されてきたものである。筆者は新羅瓦の研究を志しており、これらの瓦の資料調査を思い描いた。幸い、堀内寛昭氏に仲介の労をとって頂き、廣田氏よりご快諾を頂戴することができた。まずは文頭にあたり、廣田氏のご厚意に深く感謝の意を表するものである。

さて資料調査は、(1) 実測、(2) 拓本、(3) 写真、(4) 同範瓦の同定という4件の作業を中心に行なった。(1)と(2)は特徴的な製作技法を見出すことに留意し、(3)は瓦当の表裏と技法の分かる部位のカラー写真を撮るとともに、一部本文使用のための白黒写真を村井伸也氏に依頼した。(4)は出土地の手掛りを得るため、図録・報告書類を検索した。ただし写真・拓本からの比較であるため、言うまでもなく厳密なものではない。

小稿ではまず資料の概要について述べる。ここでは拓本と断面図をもって資料の概要とする(図4~10)。基本的に個別説明は行なわない。瓦番号は『古瓦図考』を踏襲する。大きさ・色調・焼成・同範関係などは文末に表化する。ついでいくつかの項目をあげ、資料調査を通して得られたところを覚書という形で示すこととしたい。今回、特筆すべきは、第一に顎部に文様をもつ軒平瓦に対する新知見を得たこと。第二として、瓦当に丸瓦を円筒状につけ、その後半截成形した軒丸瓦を見出した点。第三に斜方向に丸瓦を接合した瓦当を確認した点などである。

2. 資料の概要

(1) 収集の経緯

廣田氏によれば、これらの瓦は昭和40年代に一括して塩見青嵐より譲り受けたとのことである。塩見青嵐は京都伏見にあり、伏見人形の研究者として著名であった。塩見青嵐は1900年、福知山市生まれ。1922年に京都絵専を卒業し、1944年から1965年まで伏見稲荷大社に奉仕し、『稲荷新報』・『大社詣』等を編集した。『伏見人形』・『京の道標』などの著作がある。1970年に、70歳で歿している⁽²⁾。

塩見青嵐がどのような経緯で、これらの瓦を蒐集されたのか、興味あるところであるが、すでに故人となっており、聞き取りはできない。資料にはいくつか註記されたものがあり、これによって一部の出土地や旧蔵者を確認することができる。註記のある資料は9点ある。

註記には、72・73の「萩原敏雄」、102の「□堂」、103の「鈴鹿泰延」の3氏の名が見える。この中で102は番号が付けられており、所蔵品を台帳を通して管理していたことが窺える。雅号は

表1 瓦の註記

瓦番号	註 記	筆記方法
6	大和／熊凝寺／白鳳時代	朱書（青インクで消し線が入る）
13	普門	墨書
48	四天王寺	朱書
62	興福寺	墨書
71	楽浪	青インク
72	渤海国首府／東京城（王城）ノ瓦／千年前／（荻原敏雄）	墨書
73	渤海国首府／王城東京城ノ瓦／（千年前）／（荻原敏雄）	墨書
102	百十九号／興輪寺／□堂蔵	朱書
103	京都／鈴鹿泰延氏／寄贈	朱書

確認できないが、慶州在住の収集家として著名であった諸鹿央雄の旧蔵品の可能性が高い。

ついで出土地は、6「大和熊凝寺」、13「普門」、48「四天王寺」、62「興福寺」、72・73「東京城」、102「興輪寺」の7点に記載されている。13は新羅の都であった慶州の地名、48・102は慶州にある廃寺である。72・73の東京城は、高句麗の故地に建国された渤海の五京の一つで、現在の中国黒龍江省寧安市に所在する。これらの遺跡からは同範・同文瓦の出土が確認でき、註記の内容を保証する。⁽³⁾

ところが6と62は日本奈良県にある寺院名であり、6には消し線が入る。⁽⁴⁾ たしかに62は興福寺でなく慶州雁鴨池などに同範瓦を求めることができる。瓦の価値を高める為に出土地をいつわる場合、興福寺のように誰もが知っている寺院名で、詐称することが多いようである。筆者も某所で「平等院」と書かれた韓国の古瓦を見たことがある。6もまた文様だけを見れば、新羅瓦とするのに躊躇はない。ただ熊凝寺があまり一般的でない点が気になる。熊凝寺とは聖徳太子が発願した熊凝道場をさすと見られ、大和郡山市にある額安寺がその後身とされる。その額安寺からは6と同範ではないが、新羅系有稜六弁軒丸瓦（図1）が出土しており興味深い。⁽⁵⁾ これが詐称であっても、かなり古瓦に精通した者の仕業であろう。

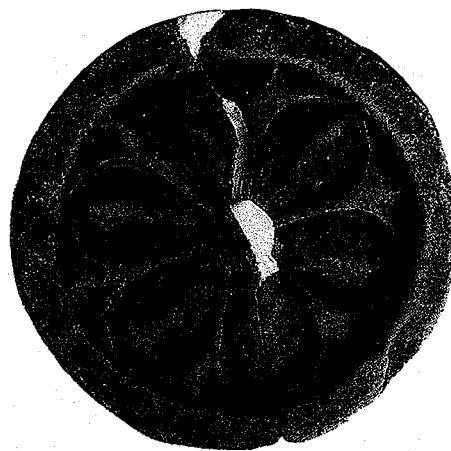


図1 額安寺出土新羅系軒丸瓦写真

(2) 瓦 種

ひろたコレクションには、軒丸瓦70点（1～39・41～71）、「谷鏡瓦」1点（40）、軒平瓦29点（73・75～78・80～102・104）、棟飾平瓦1点（79）、平瓦2点（72・74）、塼1点（103）といった多種の瓦が含まれている。

軒丸瓦 径が9.5cmの小型瓦（16）、径21.3cmの大型瓦（39）を含む。

「谷鏡瓦」40は円形の瓦当に、斜め方向に丸瓦を接合させている（図2）。井内功はこのような瓦を日本の「谷巴」と同種の用途をもつとして、「谷鏡瓦」と呼んでいる。⁽⁶⁾ これは統一新羅時代の瓦によく見られる瓦種であるが、瓦当面が楕円形をなすものも多く、「楕円瓦」・「楕円瓦当」などと通称されることも多い。これについては後章で再び述べる。

軒平瓦 平瓦としてあげられた104は、朝鮮時代の典型的な軒平瓦の形態である。顎部に施文された瓦が10点ある。

棟飾平瓦⁽⁷⁾ 79は逆軒平瓦とも言うべき瓦で、軒平瓦の下縁側に平瓦が接合されている。統一新羅時代によく見られる瓦種であり、棟飾瓦の一種と考えられる。

平瓦 軒平瓦として扱われている72・74は平瓦と考えられる。端面は指頭圧痕が見られるが、これは高句麗・渤海の平瓦に普遍的に見られる調整であり、軒先に置いて装飾したものではないと考えられる。

磚 一般的な方形磚ではなく、特異な形態をもつ(図3)。文様面は長方形、平面・断面形は台形をなす。形態から建築材として使用されたと考えられる。

(3) 出土地と時期

註記により出土地の分かるものは前述の通りである。同範・同文関係を調べると、蒐集された瓦のうち約4分の3は、慶州出土のものに求めることができる。その中で唯一、磚103は高麗の王都開城の王宮址(満月台)出土のものと同範である。不明なものについても慶州的な文様が多い。また71~74の4点は朝鮮半島でなく、中国から将来されたものである。

三国・統一新羅・渤海・高麗・朝鮮時代まで幅広い時代の瓦が含まれている。

高麗時代の瓦磚として確実なものは、12世紀以降の軒瓦の文様の主流となる鬼目文の70、同じく鬼目文と唐草文が組み合う96、高麗王宮址に同範例のある103である。また『朝鮮瓦磚図譜VI』では14・15・17・18・99・102を高麗時代として分類しており、ほぼ異論のないところであろう⁽⁸⁾。また中国の瓦のうち、註記のある東京城出土の2点(72・73)は、渤海時代の瓦である。朝鮮時代の瓦は104の1点のみである。

三国時代の瓦は、周縁素文で6~8の単弁をもつ軒丸瓦(1~8・19)が、これに該当する。この内、文様から見て1を除いたすべてが新羅、その多くが慶州地域の瓦と判断される。1は百済か新羅のいずれか。9は周縁が素文であれば、三国時代に収まる可能性がある。

統一新羅時代の瓦はこれら以外のものを一般的にさすが、上原真人が指摘するように⁽⁹⁾、これらの中には高麗時代の瓦が相当数含まれていると見られる。

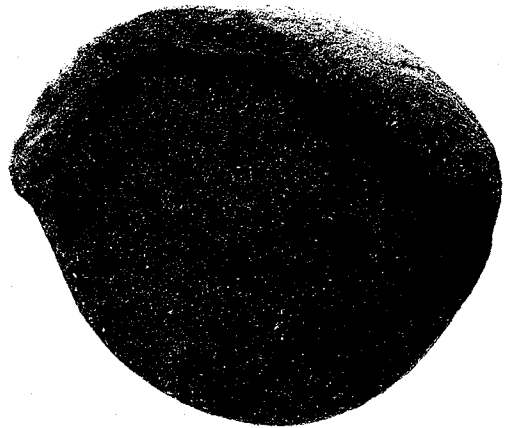


図2 「谷鏡瓦」40瓦当裏面写真

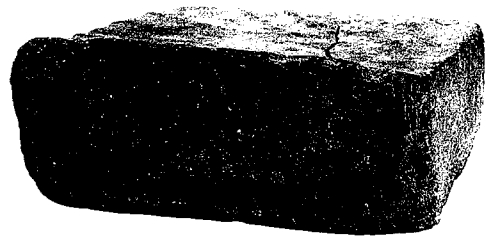


図3 磚103写真

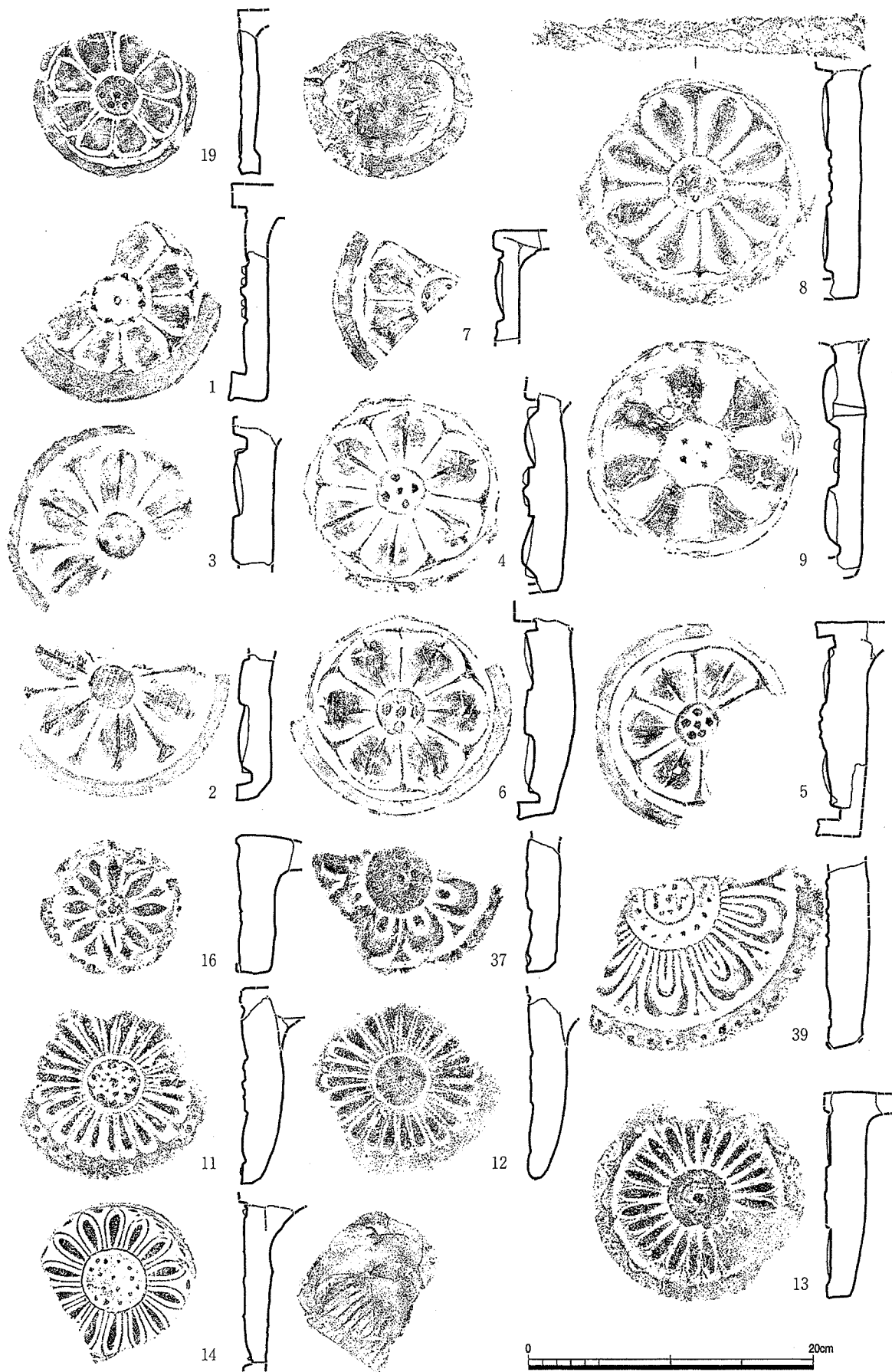


图4 軒丸瓦拓影·実測圖1 (1/4)

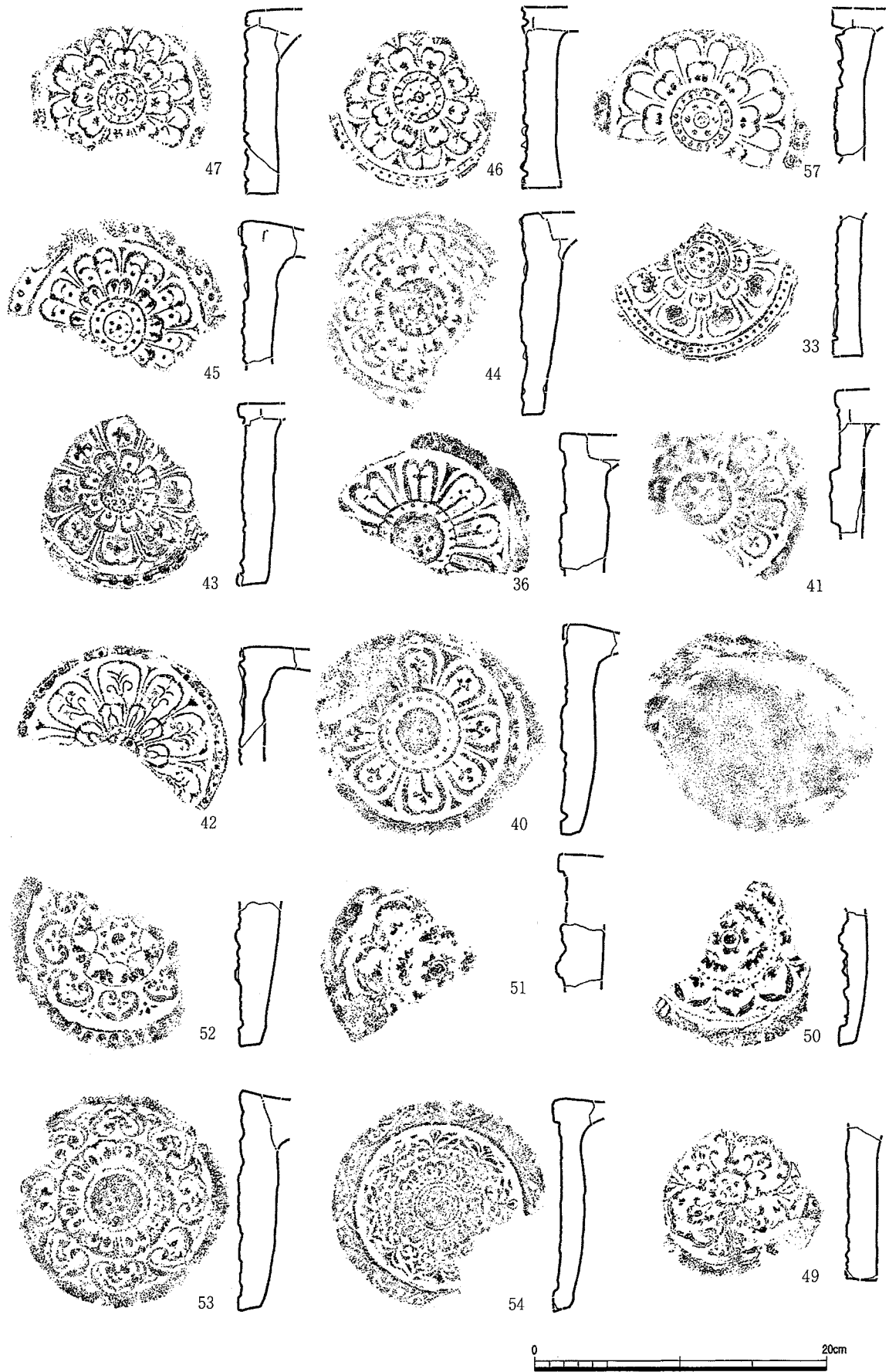


図5 軒丸瓦拓影・実測図2 (1/4)

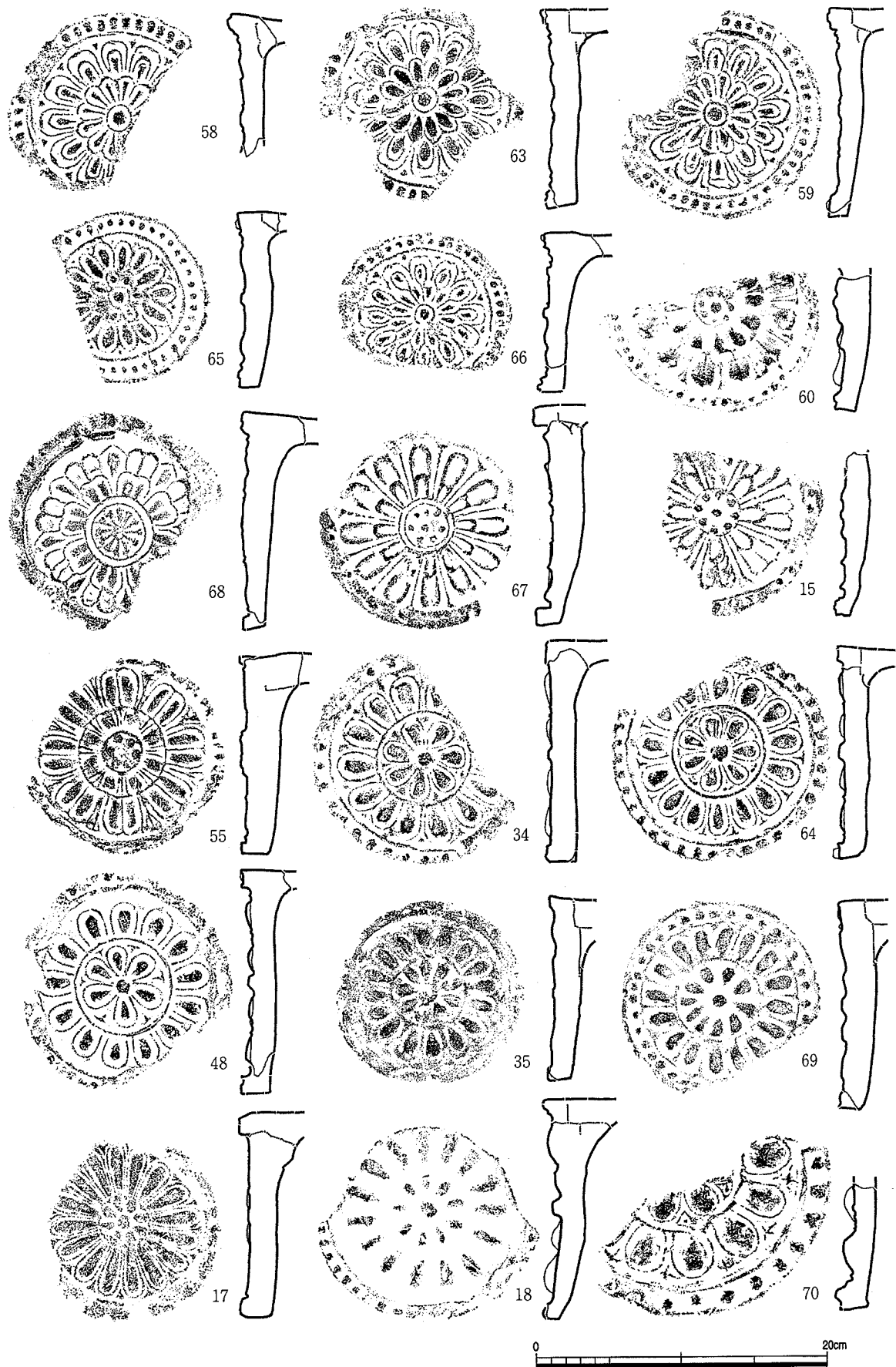


图6 軒丸瓦拓影·実測図3 (1/4)

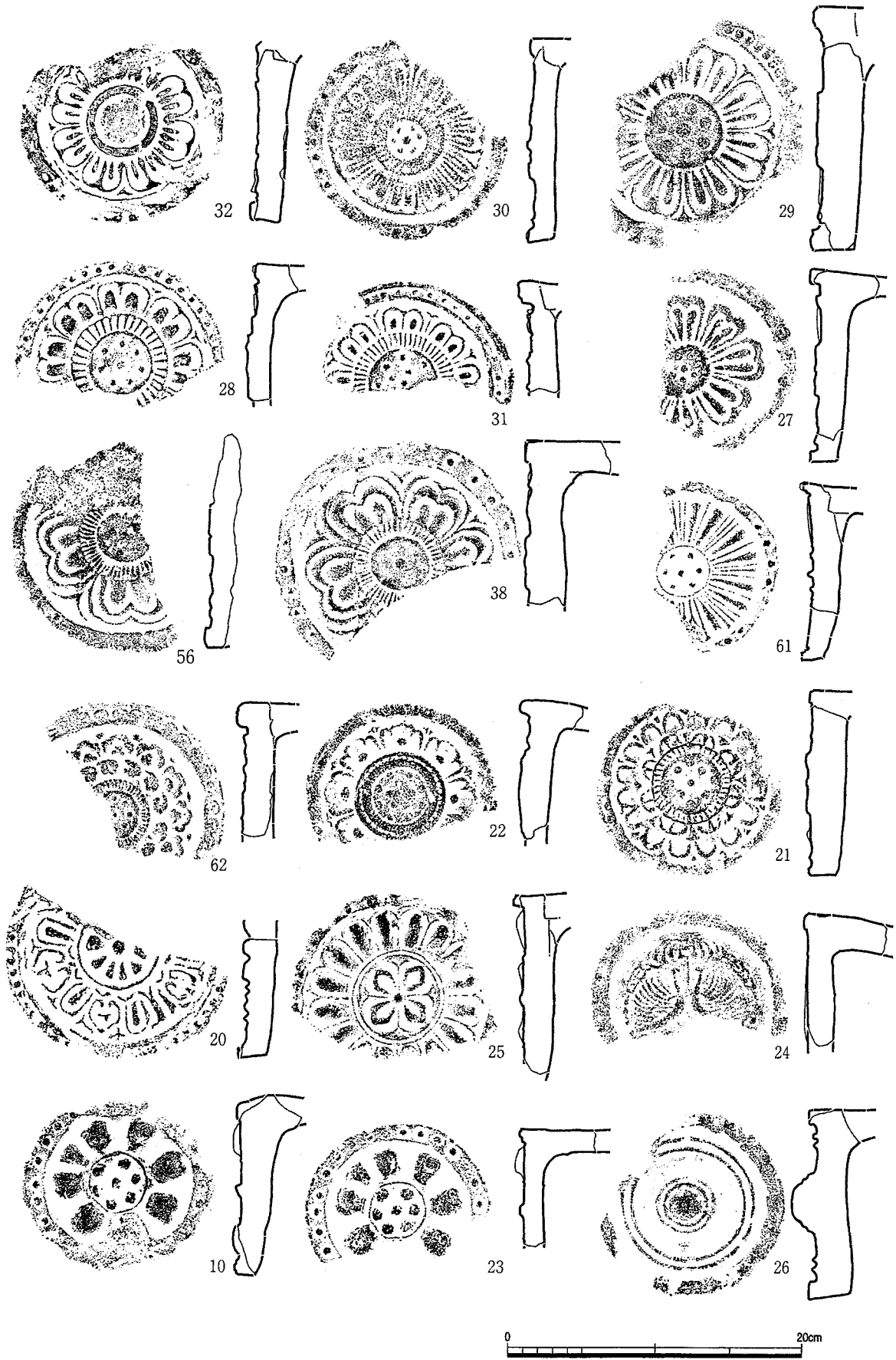


図7 軒丸瓦拓影・実測図4 (1/4)

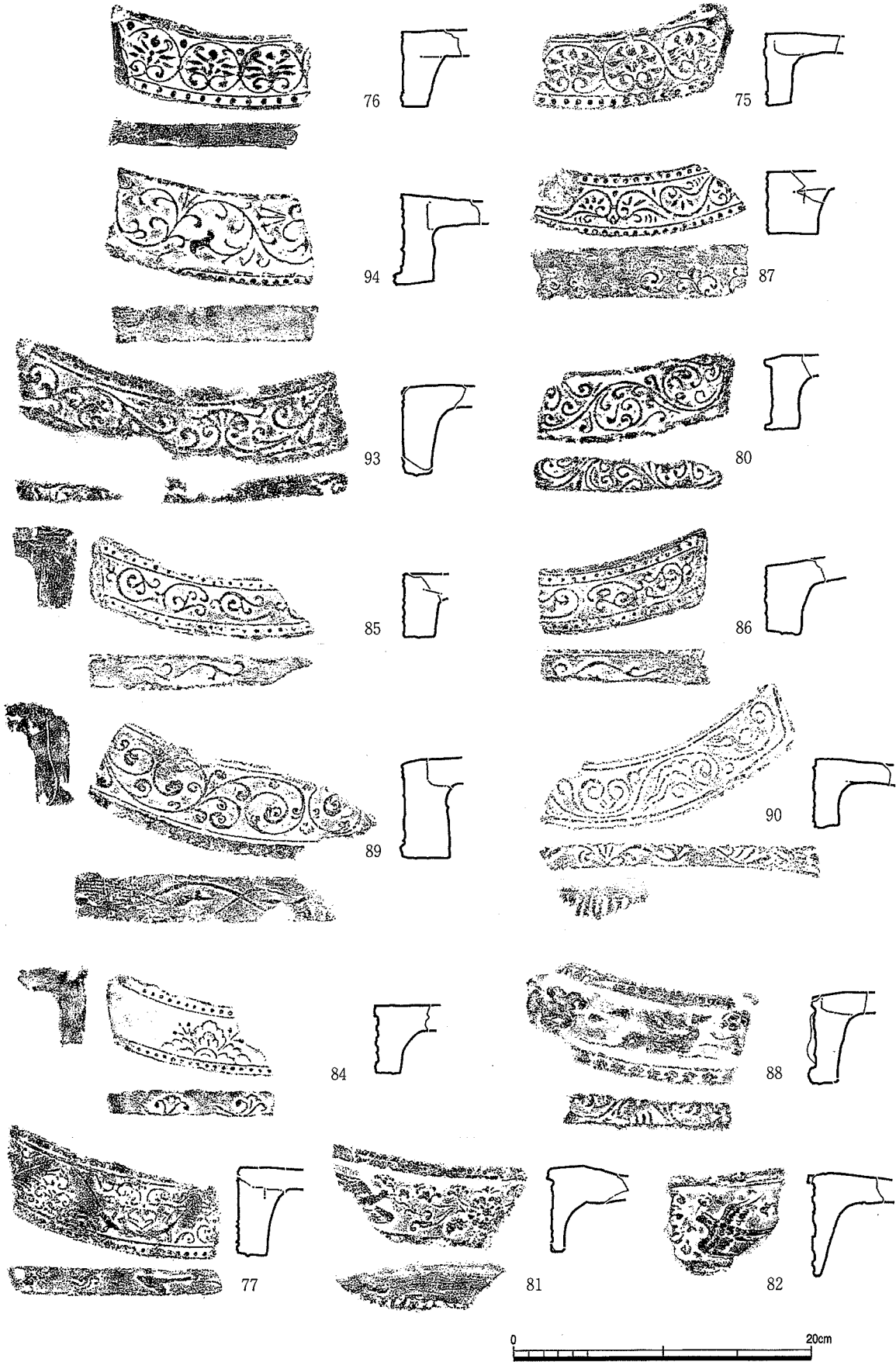


图8 軒平瓦拓影・実測図1 (1/4)

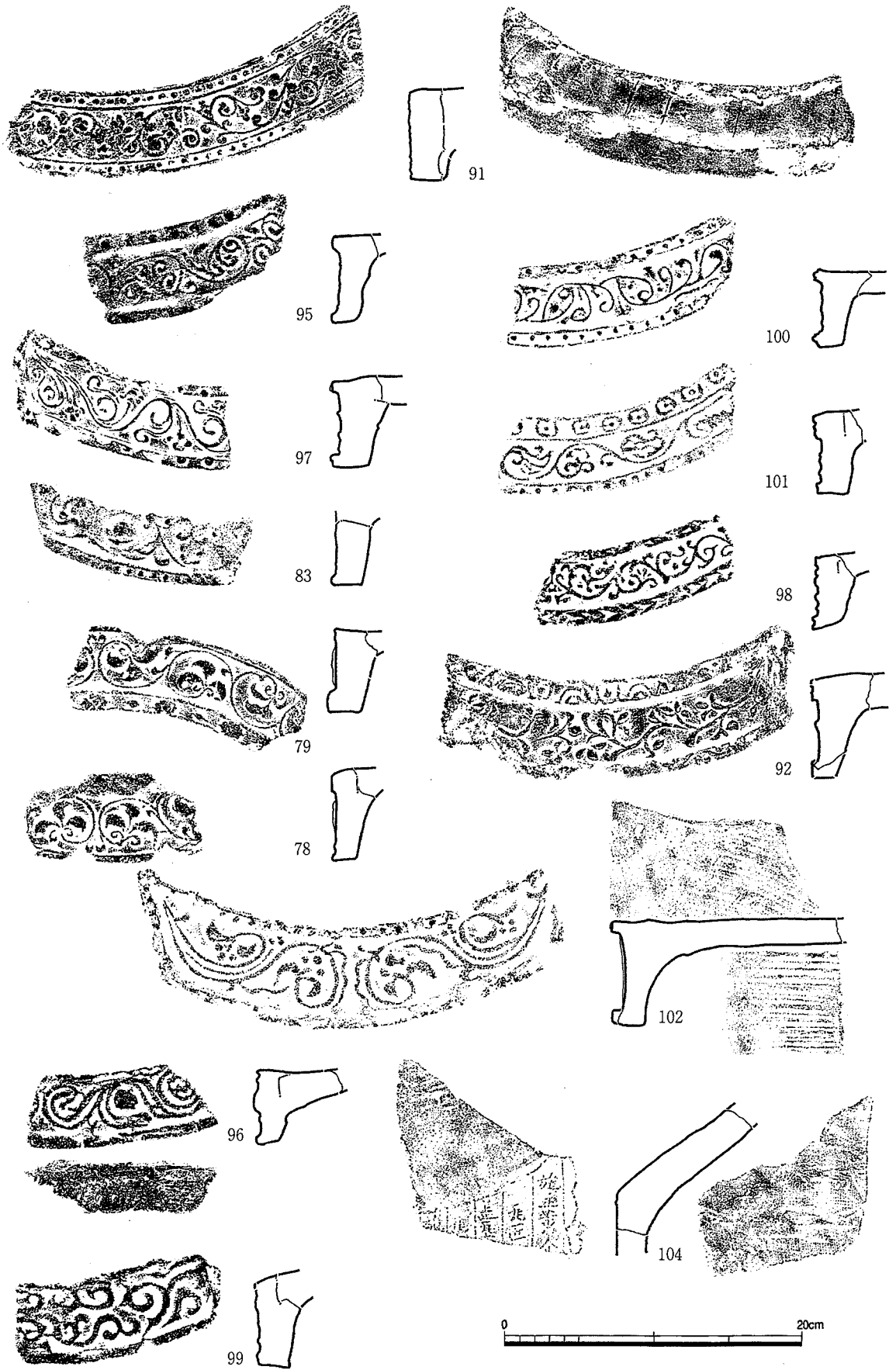


図9 軒平瓦拓影・実測図2 (1/4)

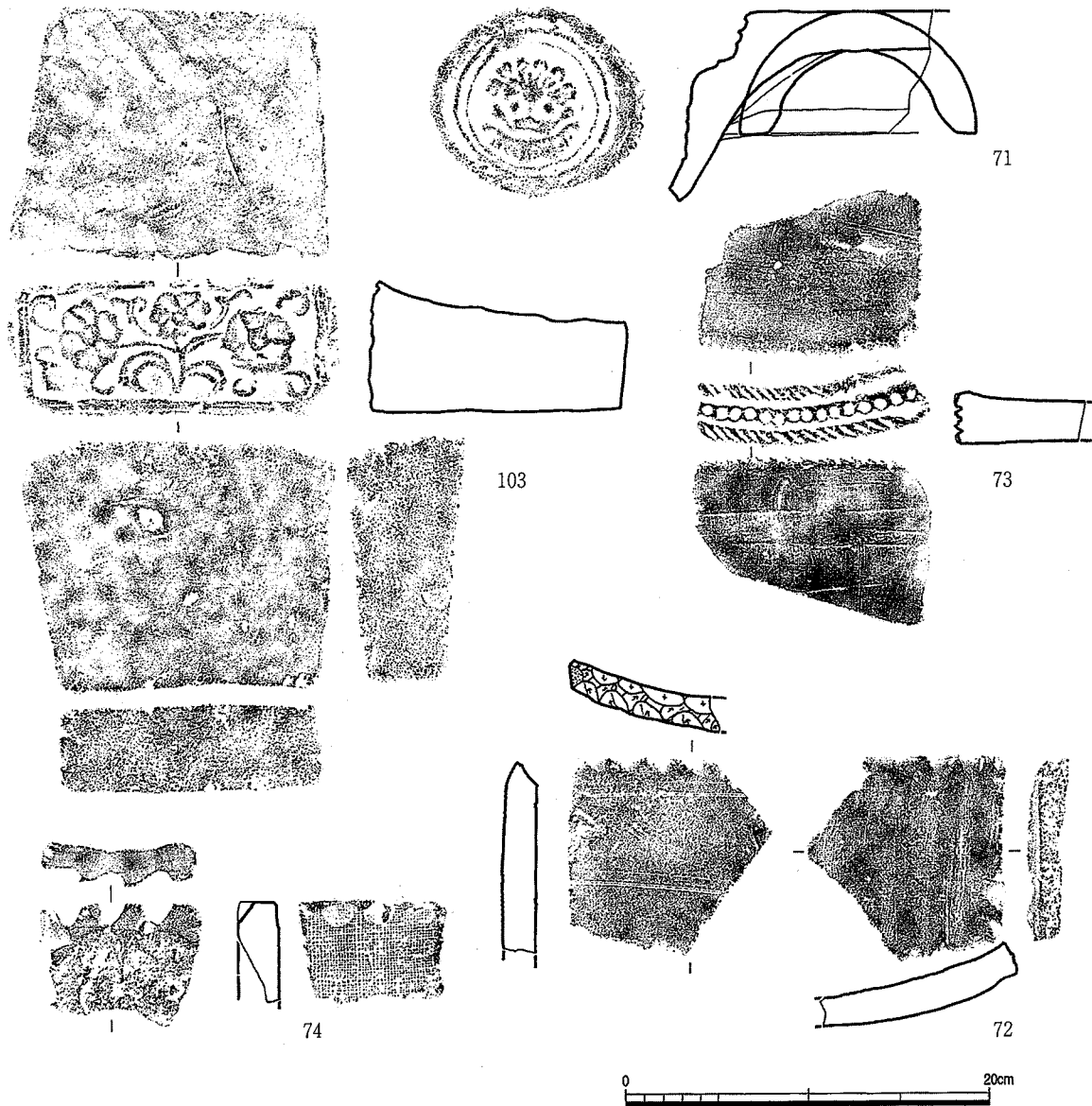


図10 塼および軒丸瓦・軒平瓦・平瓦（中国）拓影・実測図（1/4）

3. 新羅古瓦の覚書

(1) 顎部施文軒平瓦の製作技法

顎部施文瓦 顎部に文様のある瓦は、新羅古瓦の特徴の一つとしてよく挙げられている。顎部施文瓦に初めて注目したのは、濱田耕作・梅原末治である。⁽¹⁰⁾ 図11拓影を図示して、瓦当文様が異なる軒瓦に、同一範による顎部施文が行なわれていることを明らかにした。両氏はその施文方法について「別殊の主紋の型に粘土を捺して瓦当を作り、其の粘土の喰み出した処を整理切断した後、之を共通の下顎文の平板型上に転がして印したもの」と考えた。また同じ顎文をもつ瓦は「同一瓦匠若しくは同一工場に於いて製作せられたものであり、而かも其等が出土地を異にする場合に於いては、同一瓦窯から相異なった寺刹に供給したものであることを実証する」と評価した。

このうち両氏の施文方法については首肯しがたい。軒丸瓦については「枷型」の概念の下（54

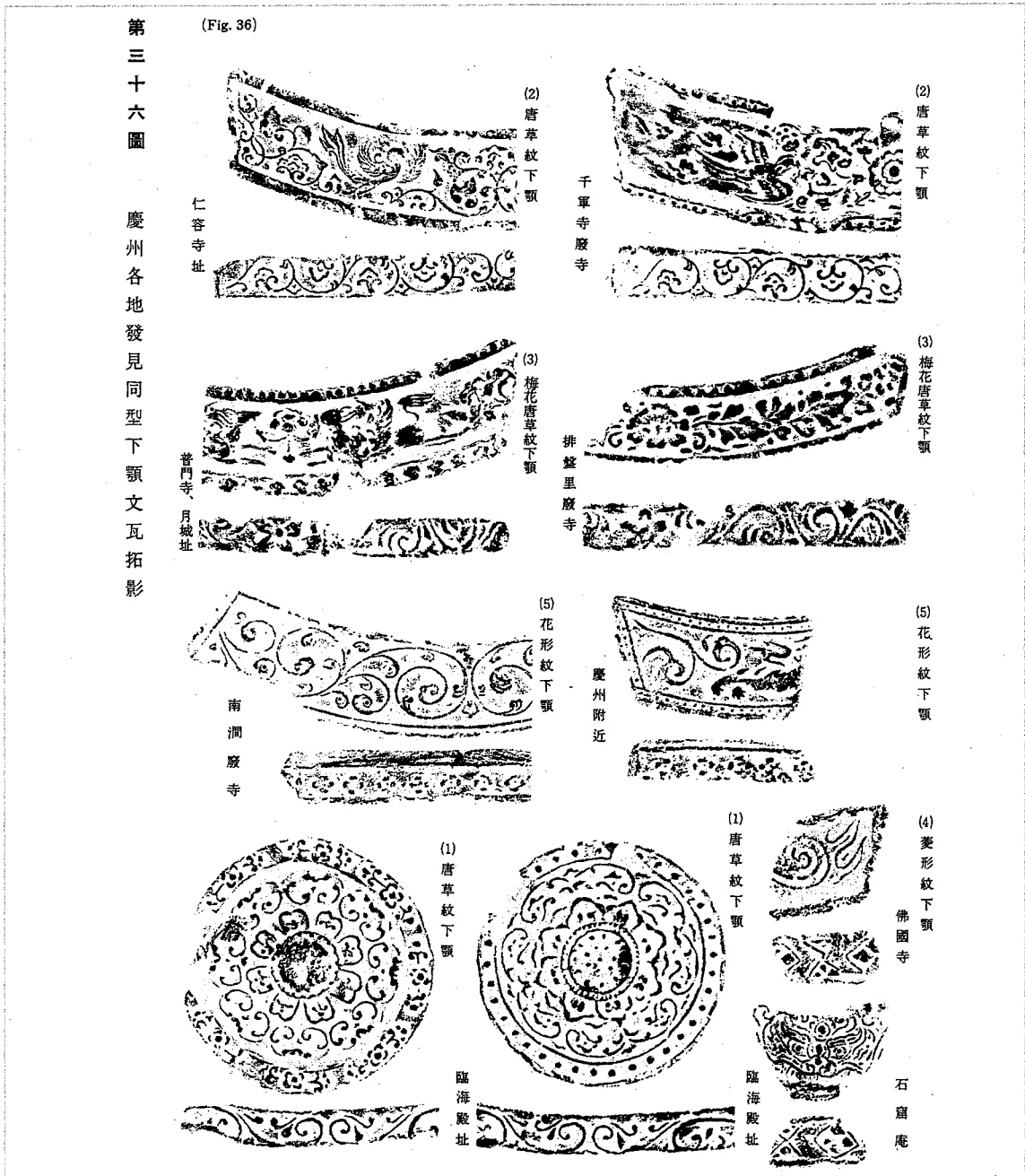


図11 同範の顎文を有する軒瓦拓影

頁図12)、造瓦技法の復原が行なわれているが、この枷型上に文様を加えたものと見て間違いのないだろう。いっぽう軒平瓦については、これまであまり考究されていない。漠然と、顎部に合わせた範によって、文様が押捺されたと考えられているのではなからうか。ひろたコレクションには比較的多くの顎部施文軒平瓦が含まれており、これらの観察を通して、施文方法を復元する手掛かりを得た。

軒平瓦の範型 まず軒平瓦の範型について見ておきたい。範型には木製・陶製・石製があるが、新羅では比較的多くの陶製範が出土しており瓦範の形態が分かる。ただし軒平瓦の範型は、軒丸瓦や鬼瓦に比べ数が少なく、現在2種類のみが知られる。

その一つ(図13-1)は李養璿の蒐集品⁽¹²⁾で、扇状の基部から一段高くして文様を刻んでいる。

したがって断面形は凸字状をなす。大きさは長さ40.0cm、幅19.3cmで、厚さは6.5cmある。もう1点(2)は慶州金丈里瓦窰址から1978年に発掘されたものである⁽¹³⁾。破片であるが、前者とほぼ同様な形態をなすと考えられる。異なるのは側縁側にも基部が広がる点である。

両者とも軒丸瓦の分類を援用すると、範が周縁まで被るB型範⁽¹⁴⁾ということになる。両者の事例はともに周縁が高くないが、周縁と文様部に高さの差異が生じる場合には、軒丸瓦範(3)のように3段になる。

範を下に置き軒平瓦を製作する場合、周縁を除いた文様部だけのC型範は考えにくい。また結論を先に述べると、筆者は軒丸瓦の枷型と同じく、軒平瓦の顎部も成形と同時に施文したと考えている。そのため、

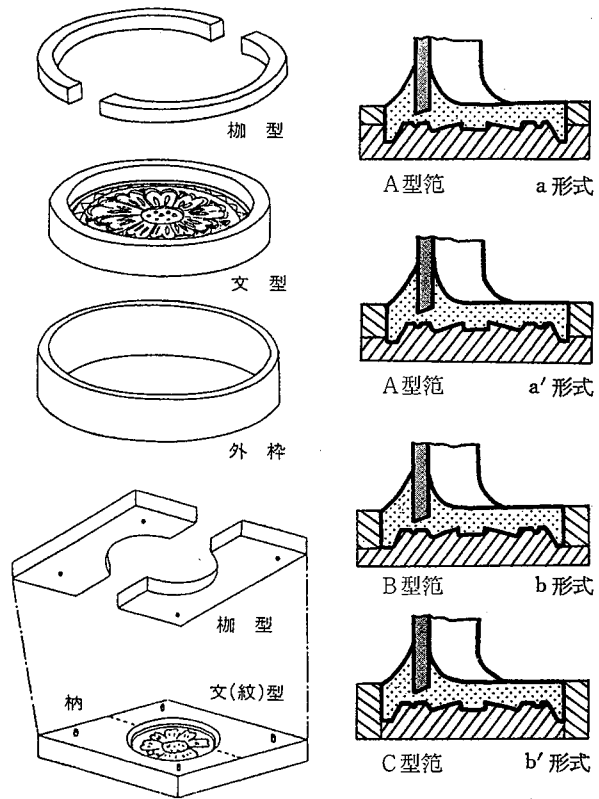


図12 星野猷二の枷型概念図

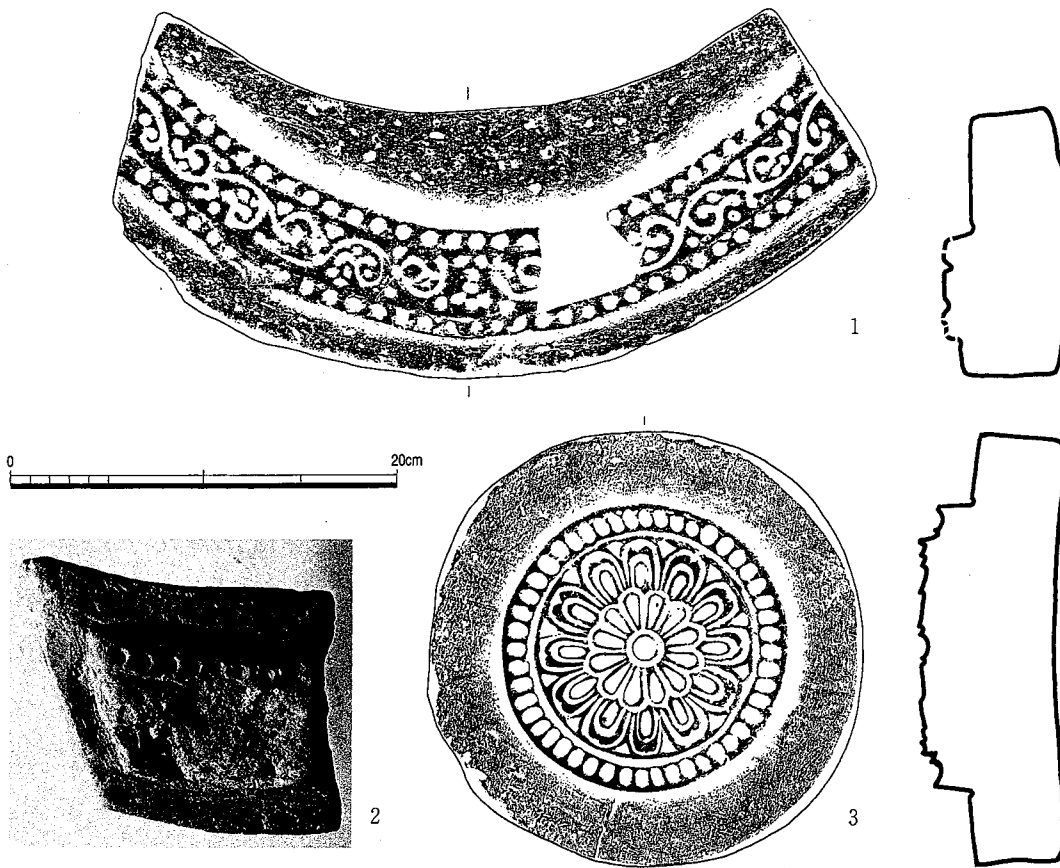


図13 新羅陶製瓦範拓影・実測図(1/4)ならびに写真

周縁外側まで被るA型箆では顎部に文様を刻んだ場合、箆を抜き取る時に文様が潰れてしまう。したがって顎部施文軒平瓦では、陶製箆と同じくB型箆を使用したと仮定する。

軒平瓦の成形 韓国の軒平瓦の製作技法は日本のそれとは異なっている。日本の場合、平瓦が1枚造りに移行した後は、軒平瓦も同様に横位におかれた成形台上で造られ、箆は横方向から押捺されたと考えられる。⁽¹⁵⁾ところが韓国では一貫して筒形成形台による4枚造りが主流であった。そのため高麗時代後期に滴水瓦が導入される前までは、軒丸瓦と同じく、箆を下に置き粘土で瓦当面を作り、これに別個に造り置いた平瓦を差し込むように接合したと考えられる。実際に平瓦と瓦当面との乾燥度が異なるため、平瓦がとれた状態の軒平瓦が多い。

顎部箆の形態 ひろたコレクションの中には(77・80・84~90・93)10点の顎部施文の軒平瓦が存在する(図8・14)。そのなかで87は他の瓦と様相が異なっており目を引いた。87の顎部文様は、瓦当面から連続しておらず、やや離れた位置から始まっていた。そして文様のない部分には木目状の痕跡が観察された。また瓦当の幅に対して、顎部が幅広いことも特徴として挙げる事ができる。

新羅の瓦は文様が細密であり、屋根にあげた時の装飾効果がどの程度あったのか疑問視されることが多い。しかし概念的には文様は装飾として見られることを前提としており、顎部文様もまた瓦当面側にあるのが望ましい。実際、多くの図録類を見たが、この1例を除いてすべての顎部文様は、瓦当面にほぼ接する位置から始まっている。

このようなエラーがどうして生じたのだろうか。

龍文軒平瓦の中に、87と同じ顎部文様をもつ軒平瓦が存在する(図15B)。こちらの方は勿論、

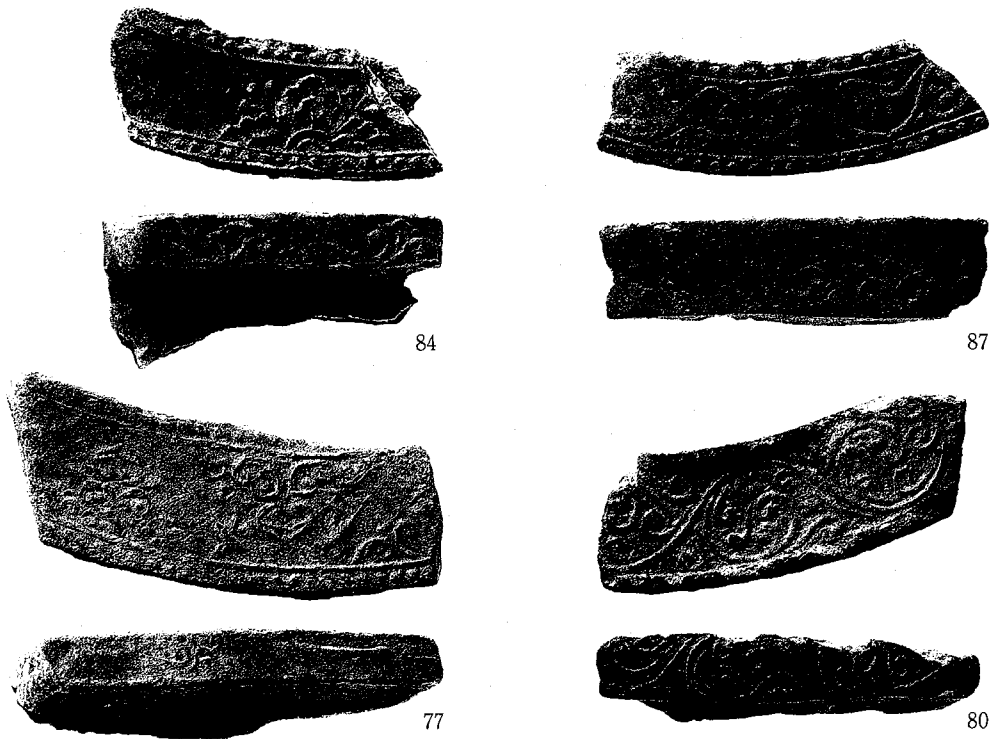


図14 軒平瓦77・80・84・87写真

瓦当面から連続して顎部文様がある。前述の范型と成形方法を念頭におき、図16A・Bのように、この両者を比較、説明できるモデルを考えた（87の瓦範基部上面から瓦範上面までを10mmとする）。粘土を受ける上半に文様があり、下半が無文の弓状の范型を瓦当面下縁に沿って、基部上に置かれた状態を想定した。これを顎部範と呼んでおく。

すなわち、ここでは同一の顎部範使用による両者の差異を、瓦範の文様面と基部の高さの違いと捉えたのである。言い換えれば、龍文軒平瓦（B）の范型に合わせて作られた顎部範が、87（A）の瓦範にも転用されたが、87は瓦範の文様面と基部上面の比高が、龍文軒平瓦に比べ低いため（ $a < b$ ）、瓦当面に近い部分に文様のない空白が生じたものと推定したのである。

このように考えてもう一度、53頁図11を見直すと、他の例でも顎部文様の範囲に差異があることに気付く。（5）左と（5）右を比較すると、わずかながら（5）左は、87と同様に瓦当面側に文様の見えない空白があり木目痕が見える。いっぽう、（3）左と（3）右を比較すれば、（3）左では顎部文様が瓦当面側で途切れているように見える（梅花文に注目すること）。この場合は図16C・Dで示したように、（3）右（D）より（3）左（C）の方が、瓦範の文様面と基部の高さが僅かながら高かったため（ $c > d$ ）、文様が途切れてしまったと考えることが可能である。

以上が筆者の考えであるが、無文部分のある范型ならば、成形後新たに捺したと考えても、ぶれて同様な現象が現われるのではないかという反論が予想される。これについては、文様ならびに顎部文様と同じであれば、顎部文様のあらわれ方が同じであるか否かを調べることによって、その成否を確認できる。例えば、ひろたコレクションの中には（3）左と同じ組合せの文様（図8—88）があるが、これも同様に瓦当面側の文様を欠いている。もう少し良好な複数の事例を示せばよいが、図録類の検索だけでは思いのほか難しい。今後の課題としたい。

顎部範の性格 このような筆者の考察が正しければ、顎部範は成形時に軒平瓦の下縁にあって、顎部の粘土を受ける存在として、軒丸瓦における枷型と同様な機能を持つことになる。実際に、ひろたコレクションでは、全く無文の顎部範の痕跡

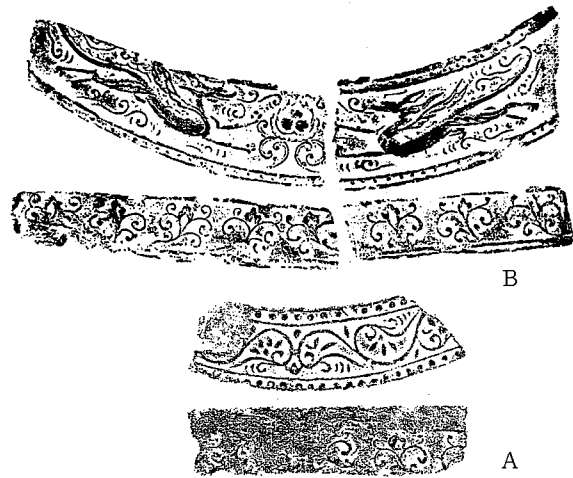


図15 87と同範の顎文をもつ軒平瓦拓影（1/4）

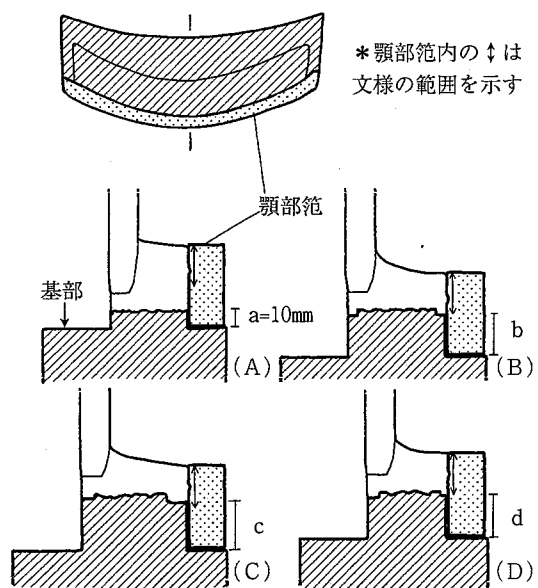


図16 顎部範概念図（断面：1/4）

をもつ軒平瓦（図8—94）を確認している。これが他の顎部施文瓦に時期的に先行するわけではないが、施文具が無文になったと見るより、ある機能をもつ道具に文様を入れたものも存在すると考えた方が、理解は容易であろう。顎部範は顎部に文様を施文するために生み出された道具ではないと思う。とはいえ軒平瓦の顎部面は文様がない場合、横方向にナデが施される場合が多く、顎部範の痕跡を認めることは難しい。しかしながら、顎部範は範型と組合せて使用すれば顎の厚みを一定にすることができる利便性がある。顎部施文軒平瓦と同じく断面形が長方形になる軒平瓦もまた、顎部範使用の可能性を考慮すべきである。^(補註)

ここでは平瓦凹面側に範型を使用しなかったかどうかの問題が残るが、軒平瓦は一様に凹面側にナデが施されており、範型の痕跡は見られず、範型の有無については判断できない。ただし、筆者は軒平瓦では作業上こちら側に範型がなくとも支障はないと考えている。

(2) 丸瓦部半截成形

軒丸瓦の成形 軒丸瓦は、別個に製作した丸瓦を、瓦当に接合するのが一般的な成形方法である。これに対して、筒状に瓦を付けた後に、不必要なところを切除する成形方法がある。ひろたコレクションの中にもこの成形方法による軒丸瓦を確認した。

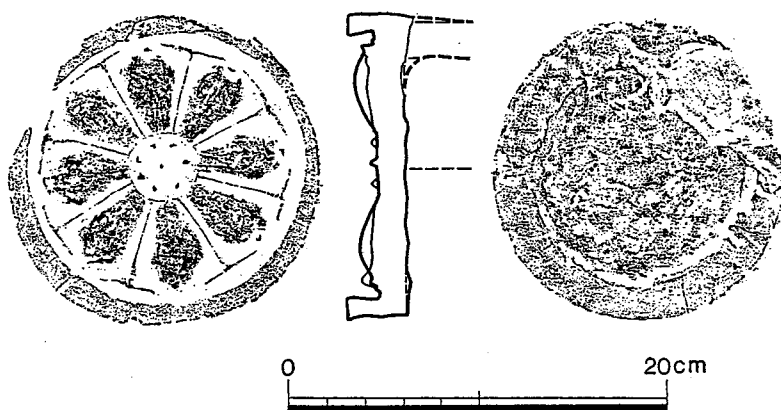


図17 月城垓字出土軒丸瓦拓影・実測図 (1/4)

これは日本では「一本造り」と呼ばれるものに含まれるが、この「一本造り」は異なる造瓦方法の総称として広範囲に使用されており、問題が多い。⁽¹⁷⁾ また新羅瓦に日本での名称を持たせるのも混乱の一因となると思うので、小稿ではこのような瓦当を「丸瓦部半截成形」とし、丸瓦を瓦当に接合する一般的な成形に^{あいたい}相対する呼称としたい。

朝鮮半島における丸瓦部半截成形は、⁽¹⁸⁾楽浪瓦に多く認められ、⁽¹⁹⁾高句麗・⁽²⁰⁾新羅（図17）でも確認され始めている。この成形方法は、さらに瓦当裏面に布目痕が残るもの（Ⅰ式とする）と残らないもの（Ⅱ式とする）に大別できるが、現時点ではⅠ式は楽浪・高句麗に、Ⅱ式は楽浪・新羅に認められる。また日本においても福岡県神ノ前2号窯や月ノ浦1号窯などから、6世紀末から7世紀初といった最古級の瓦の中に、Ⅱ式による軒丸瓦が存在しており注目される。⁽²¹⁾

軒丸瓦19 本瓦（図18）では、瓦当裏面についた筒状の瓦を半截する際の範の当たりと、瓦当裏面下半にやや突出した丸瓦の痕跡が確認できる。これらの特徴は、丸瓦部半截成形の典型的なものである。裏面の調整は丸瓦および丸瓦痕跡の内側に接合のためのナデが観察され、布目痕は見られない。丸瓦痕跡上面はヘラケズリにより、側面は回転ナデが施されている。なお丸瓦痕跡

のはずれた部分には、縄叩きともとれる圧痕が存在する。瓦当は非常に薄手で、また瓦当周縁にもヘラケズリが加えられている。

粘土紐巻きあげ成形 本瓦は丸瓦部は欠失しているが、瓦当裏面に布目痕跡が見えないことから「粘土紐巻きあげ成形」や「泥条盤築」と呼ばれる技法に準じる方法によって成形されたものと想像される⁽²²⁾。

この技法については、井内潔が漢代の瓦を詳細に検討して、その過程を図解を交え、4段階にわけて説明している⁽²³⁾（図19）。本瓦の理解を深めるために氏の復原をたどっておこう。

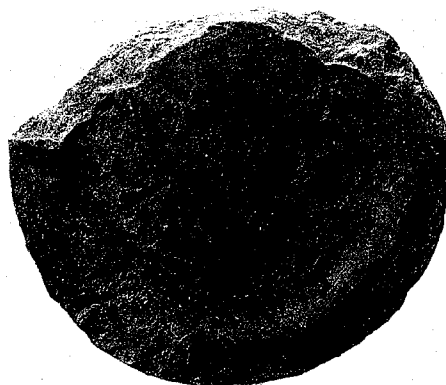


図18 軒丸瓦19瓦当裏面写真

- (1) この技法は回転台の上に範をおき、粘土で瓦当をつくる。
- (2) その上に粘土紐を巻き上げて土器を作るようにあて具と叩き板をもって円筒状に成形する。
- (3) 半乾燥させる。
- (4) 瓦当文様の上になる部分を下にして凹型成形台にのせる。切り離す部分に糸のついた細い棒を差し込み、糸を上方にまわし瓦当裏面の半分をきる。ついで篋で成形台に沿って横方向に切り取る。棒状の工具を使用せずに篋で適当に切り取ったものも存在する。

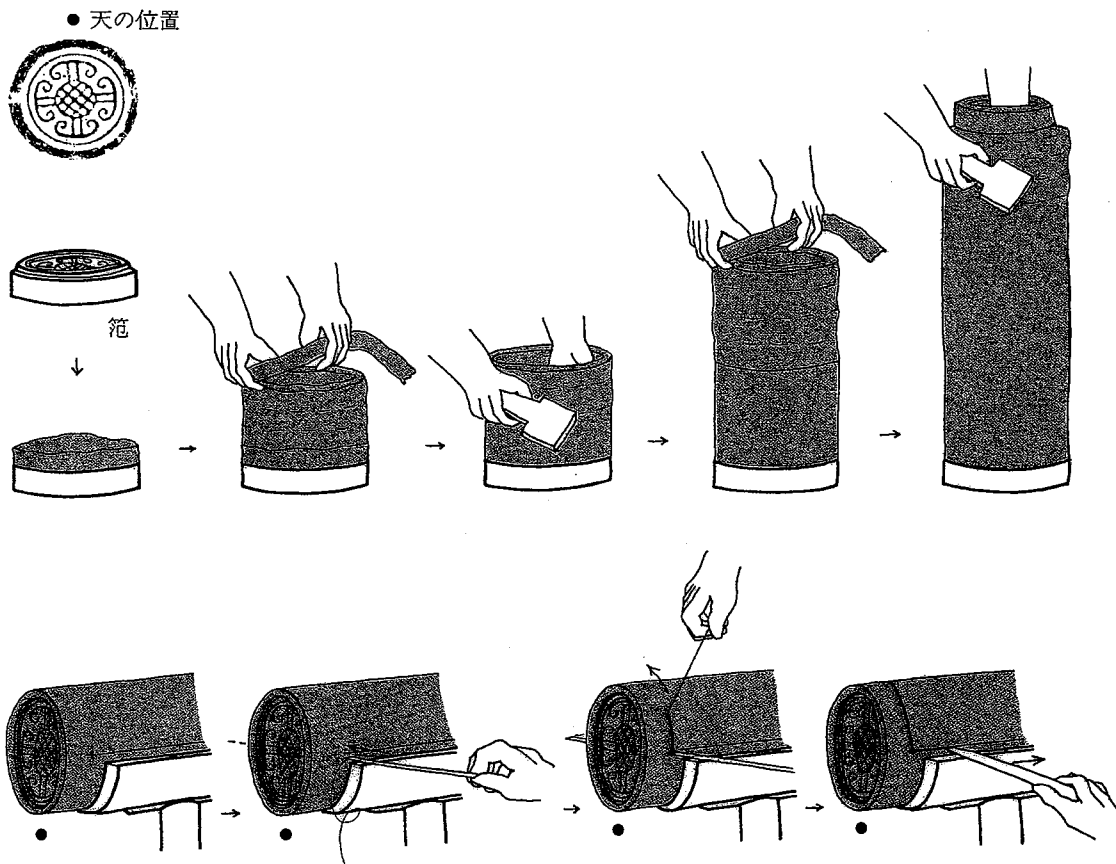


図19 粘土紐巻きあげ成形による製作工程復元図

(3) 軒丸瓦の接合方法

新羅の軒丸瓦を接合方法によって編年しようとする試みは、尹根一によって先鞭がつけられている。⁽²⁴⁾ 筆者も製作技法上の変遷を考える上で、接合方法が鍵になると思い、この点に留意して観察を行なった。しかしながら、文様の同じものを複数観察していないため、それのもつ製作技法を十分に引き出すことができなかった。以下いくつかの観察結果を記す。

丸瓦を付ける位置 丸瓦は基本的にはほぼ瓦当上端に沿って付けられている。日本奈良時代の瓦に見られるような、丸瓦の付ける位置が下がることはないようである。

丸瓦の先端を細くして、瓦当裏面差し込むものが多数を占める。その多くは丸瓦凹面側を削るようである。なお明確に接合溝をもつものは確認できなかった。一部に丸瓦を瓦当裏面に当てたり (11・53・59・62)、瓦当裏面上端を断面L字形に切除して、瓦を接合するもの (30) もあった。

丸瓦を差し込む深さは、相対的に (1) 深いもの、(2) 中間、(3) 浅いものの3段階に便宜上分けると、(1) は3・4・6～9・46、(2) は10・23・29・36・38・41・43・45・47・57・58・66、(3) は15・21・24・25・28・32・35・44・55・63に分類できる。(1) 深いものに属する瓦は、古新羅から統一新羅初期に限定されており、古い時期の瓦が瓦当に深く差し込まれる傾向がうかがえ、中には周縁にまで及ぶものもある。(2) と(3)の間には時期的な差異は見いだすことができなかった。

接合粘土 全体として日本の瓦と比較して接合粘土は少ない方である。特に丸瓦が瓦当上端に接合されるため、丸瓦凸面側の接合粘土は極めて少なくなる。また古い瓦ほど補足粘土が少ないように思われた。

刻み目 瓦当面と丸瓦の接合力を増すために、丸瓦に刻み目を入れる事例がある。ひろたコレクションの中で確認できたのは、8・15・17・24・25・30・36・41・44・45・57・59・62である。多くの場合、刻み目は丸瓦が剥離した瓦当面にボジの状態を確認した (図20)。8の凹面端の菱形刻みのほかは、すべて丸瓦端面に刻まれている。刻み目の間隔は、15のように4～6mmのものもあれば、24のように2cm前後のものもある。

接合粘土を付ける前のナデ 瓦当裏面、接合粘土



図20 軒丸瓦24瓦当裏面写真



図21 軒丸瓦47瓦当裏面写真

が剥離した部分に、溝状のナデが観察できるものがある（図21）。確認できたのは、21・29・32・47・53・55で、明らかに存在しないものは、24・25・35・59である。

このような溝状の強いナデは、日本法隆寺の飛鳥・白鳳時代の軒丸瓦でも認められる⁽²⁶⁾。その性格については、丸瓦の仮固定とされるが、粘土の喰い付きをよくするための役割も兼ねていたのではないだろうか。

（4）斜方向丸瓦当（谷鑑瓦）

ひろたコレクションには円形の瓦当に丸瓦を斜め方向に接合したものが1点（45頁図2）あった。楕円形の瓦当に斜方向に丸瓦が付くことは存知していたが、正円形の瓦当にもこの種の瓦があることは知らなかった。実際、慶州地域の発掘報告書をもても、楕円形瓦といった項目はあっても、本例のような瓦の報告はあまり知らない。これは丸瓦がある程度残っていなければ、おそらく一般の軒丸瓦との区別は難しいためであり、認知度は極めて低い。ここで1節を設け、この種の瓦についての認識を深めたい。

そのような中で井内功は、これらの瓦を「谷鑑瓦」として、楕円形19点、円形12点の資料を報告しており、その見識に頭が下がる⁽²⁷⁾。井内功がこれを「谷鑑瓦」と呼んだのは、日本の「谷

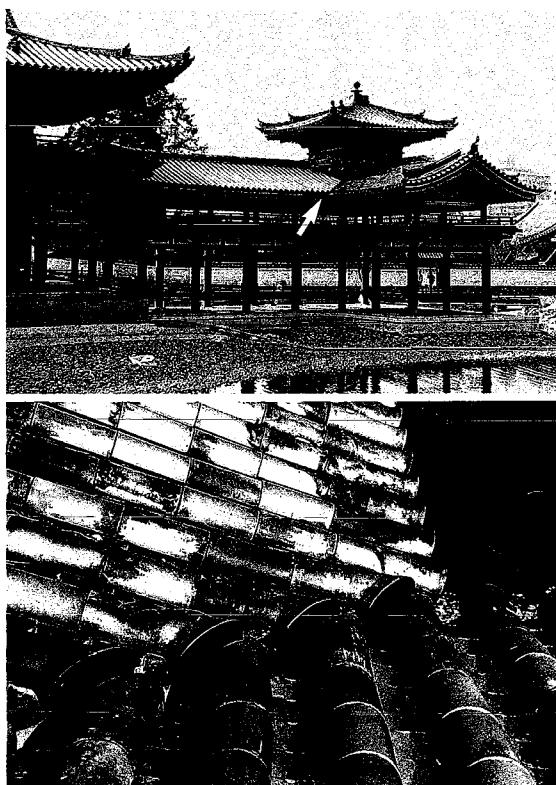


図22 平等院鳳凰堂の「谷瓦」写真

巴⁽²⁸⁾（図22）と同種の機能をもつと判断したためである。「谷巴」は「谷瓦」とも呼ばれ、屋根と屋根が接して谷をなす部分に葺かれた端瓦で、丸瓦当は新羅のそれと同じく楕円形をなし、斜め方向に丸瓦がつく⁽²⁹⁾。この井内説は韓国でも支持されている⁽³⁰⁾。

しかしながら、この瓦の用途について、筆者はまだ検討の余地があると考えている。日本の谷瓦が古代まで遡らないこと、井内自身が述べているように、この丸瓦当に伴うはずの平瓦当が見当たらないことなどが、定説とするには躊躇⁽³¹⁾される理由である。

使用箇所については、このほか軒隅説⁽³²⁾、下り棟の側端説⁽³²⁾が出されている。

軒隅説は建築史家の藤島亥治郎によるもので、「軒先は見上げに於いて建築の中心より軒隅に行くに従い漸次外方に、ある曲線をなして突き出して行く。これは軒反りに伴う茅負の関係から当然であって、日本建築でも悉くそうであるが、軒反りの多い朝鮮建築では更に甚だしい。従って、瓦の葺き筋と茅負の軸線とは軒隅に行くに従い漸次直角から斜角度を増して行く。従って、瓦当は当然斜に置かれねばならないが一般には普通の軒丸瓦を以て葺いてしまう。所が、新羅時代に於いては特に軒先の瓦当面を軒隅に到る迄揃えるが為に故意に此の工夫に出でたものである

う」とみる考えである。

ついで下り棟の側端説は、濱田耕作・梅原末治によるもので、詳しい説明はないが、おそらく棟に挿入する「菊丸」・「花巴」などといった、「棟込瓦」のようなものを想定していると思われる。

また、渤海・東京城でも斜方向の瓦当が出土している（図23）。報告書では、その使用箇所について、丸瓦当が「屋根の隅または反りのある個所」、平瓦当が「軒隅」に推定されている⁽³³⁾。簡単な記述であるが藤島説とほぼ同様な理解と見てよいだろう。東京城の丸瓦当は、ほぼ正円をなす。なお井内功は東京城の事例も谷瓦と捉えている。新羅において東京城のような平瓦当が確認されていない点は、井内説だけでなく藤島説の弱点でもある。これが本来、存在しないのであれば、当然ながら濱田らの棟の装飾瓦説の可能性も高くなる。

また井内功は円形と楕円形の関係について、「まず円瓦当形が先行して楕円瓦当形がそれに続くようだ」とする。確かに円形瓦には素縁・単弁といった古い様相のものを含むが、それほど古式のものではない。いっぽう楕円瓦は雁鴨池の創建瓦（679年）をアレンジしたの⁽³⁴⁾があり、両者にはそれほど時期差があるとは思えない。また両者はともに同じ時期に共存しており、井内が提示したものを概観した限りでは、むしろ菊花文を含む円形瓦当が楕円瓦より遅くまで残った可能性もある。

ところで『朝鮮瓦埴図譜V』PL.47（図24）の楕円瓦当は、丸瓦と瓦当との接合角度がほぼ45度である。斜め方向に大きく丸瓦を截断しているため、必然的に楕円形にしなれば、瓦当面を塞ぐことはできない。これに対して東京城の円瓦当は、その角度が20度ほどである。周縁部分を少し補足すれば、どうにか円瓦当をそのまま使用することができる。本資料（40）も丸瓦部はほとんど残っていないが、接合角度が45度に及ぶとは考えられない。したがって、角度を確認できる資料は少ないが、円瓦当と楕円瓦当の違いは、丸瓦との接合角度にあると見ることができるだろう。この違いが何に起因するのかを、慎重に検討すべきである。

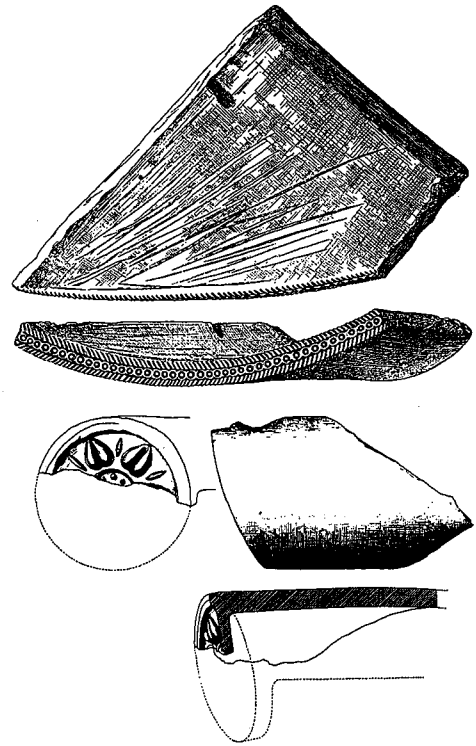


図23 東京城の斜方向瓦当実測図 (1/8)

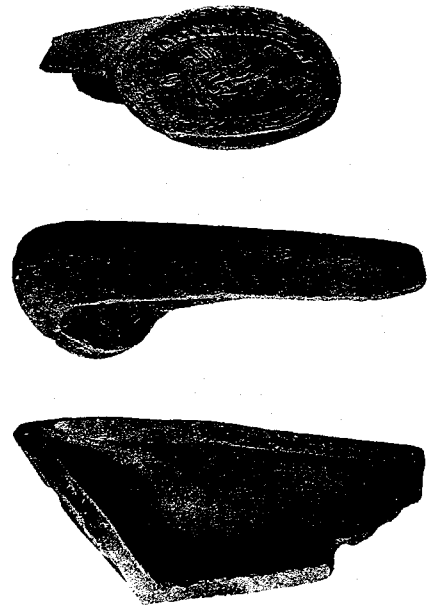


図24 雁鴨池出土斜方向丸瓦当写真

このようにこの種の瓦には、いまだ解決していないいくつかの問題を抱えている。したがって「谷鏡瓦」の名は、機能的な名称であるため避けておくべきである。いっぽう「楕円形瓦」は形態を表す名称であり、円形の瓦も同一用途とした場合、両者を包含することのできる名前が必要になるだろう。ひとまず「斜方向丸瓦当」という名称を提案したい。

4. おわりに

以上、ひろたコレクションの新羅を中心とした瓦について、資料調査を行ない、その間に思い当たったいくつかの点を覚書という形でまとめてみた。その中で顎部施文軒平瓦の範型について言及できたことは、一つの成果であったと思う。

当然のことではあるが、今回多くの遺物に接することによって、報告書や図録類では得ることのできないものを感じることができた。あらためて遺物に触れることの重要性を認識した次第である。日本には韓国植民地時代に多くの瓦が運び込まれている。今後もこれらの資料紹介を通して「新羅瓦」にアプローチできればと思う。
(2000年2月29日 稿了)

(謝 辞)

今回の資料調査は、文頭でふれたように廣田長三郎氏のご厚意によって実現したものである。氏のご健勝をお祈りしつつ、改めて深謝いたしたい。また、今回も多くの方々のご教示・ご援助に支えられ、稿を成すことができた。ご芳名を記して謝意を表する次第である。カムサハムニダ!

東 洋一・飯田道夫・出水みゆき・磯部 勝・今井麻友・尹 根 一・内田好昭・植山 茂・
大竹弘之・亀田修一・木下 亘・幸明綾子・宗教法人平等院・津々池惣一・長宗繁一・
西村恵祥・藤原 学・堀内寛昭・堀 大輔・松井忠春・村井伸也・安田周平・吉井秀夫

(五十音順・敬称略)

註

- (1) 廣田長三郎編『ひろたコレクション 古瓦図考』(ミネルヴァ書房 1989年6月)。本書は監修が木村捷三郎、個別解説が星野猷二による。京都出土の瓦を中心として「ひろたコレクション」約6百点の写真を掲載する。またそれに関連した11の論考も寄せられており、京都の瓦研究に欠かせない文献となっている。
- (2) 塩見青嵐『伏見人形』(河原書店 1987年1月)の筆者紹介。
- (3) 東京城の内、72は報告書で確認できるが、73は確認できない。しかしながら報告書では平瓦の写真は1種しか掲載されていないこと、72と73はほぼ同一内容の同一人の筆記によるものであるため、73も東京城採集のものとして認めてもよいだろう。原田淑人・駒井和愛ほか『東京城 渤海国上京龍泉府址の発掘調査』(東方考古学叢刊甲種第5冊 東亜考古学会 1939年3月)。
- (4) この消し線が塩見によるものか、それ以前のものかは不明である。ただ消し線と同じ青インクによ

- って、71の比較的新しい瓦には「楽浪」と書かれており、消し線が確かな根拠をもって入れられたとも思えない。
- (5) 清水昭博編『蓮華百相－瓦からみた初期寺院の成立と展開－』（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1994年4月）には額安寺採集の有稜六弁軒丸瓦がある。同書にはこの外に、奈良県から出土した新羅系六弁軒丸瓦として、平等坊廃寺出土品や名古屋市博物館所蔵の（伝）橘寺の瓦が、紹介されている。
- (6) 井内功『朝鮮瓦埴図譜Ⅶ 総説』（井内古文化研究所 1981年8月）65頁。
- (7) 「棟飾平瓦」はこの種の瓦に対する韓国の用語の一つ「마루암막새」に対する訳語である。金誠龜『옛기와』（대원사 1992年4月）36～37頁。
- (8) 井内功『朝鮮瓦埴図譜Ⅵ 高麗李朝』（井内古文化研究所、1978年10月）ただし井内功所蔵瓦が、韓国に寄贈された後に刊行された『井内功寄贈瓦甄図録』（国立中央博物館所蔵品図録第7輯 1990年12月）には、92も高麗時代として取り扱われている。筆者もその可能性は高いと考える。
- (9) 上原真人「十一・十二世紀の瓦当文様の源流（上・下）」（『古代文化』第32巻第5・6号 古代学協会 1980年5・6月）。
- (10) 濱田耕作・梅原末治『新羅古瓦の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第13冊 刀江書院 1934年9月）62～64頁。
- (11) 星野猷二は軒丸瓦製作において、瓦範以外に瓦当側面に用いる型の存在を想定して、枷型と名付けた。星野猷二「造瓦に関する実証的研究」（『古代学研究』第10号 1953年）、星野猷二「釜瓦製作と分割型」（『考古学雑誌』第67巻第2号 1981年9月）。これについては毛利光俊彦によって、総括的な研究がなされている。「軒丸瓦の製作技術に関する一考察－範型と枷型－」（『畿内と東国の瓦』京都国立博物館 1990年2月）。
- (12) 国立慶州博物館編『菊隱李養濬蒐集文化財』（通川文化社 1987年12月）317～319頁 図版86・88。
- (13) 金誠龜「新羅の瓦埴」（『韓国古代文化展－新羅千年の美－』中日新聞社 1983年8月）141～142頁。
- (14) 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」（『延喜天曆時代の研究』吉川弘文館 1969年4月）。
- (15) 古代においても播磨産の瓦は平瓦と瓦当を別個につくり接合しており、「包み込み」技法と呼ばれている。木村捷三郎編『板東善平収蔵品目録』（京都市埋蔵文化財研究所 1980年10月）。
- (16) 高正龍「韓国における滴水瓦の成立時期－黄州・成仏寺瓦の紹介をかねて－」（『朝鮮古代研究』第1号 朝鮮古代研究刊行会 1999年12月）。
- (17) 鈴木久男「一本造り軒丸瓦の再検討」（『畿内と東国の瓦』京都国立博物館 1990年2月）。
- (18) 井内功『朝鮮瓦埴図譜Ⅶ』（註6前掲）18～20頁。
- (19) 林博通「南滋賀廃寺式軒丸瓦製作技法」（『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』夫先生還暦記念論文集刊行会 1999年11月）で、高句麗山城である高爾山城（中国撫順市）採集資料が紹介されている。
- (20) 慶州市月城垓字遺跡で3点の丸瓦部半截成形軒丸瓦が出土した。いずれも古式を呈する百濟系八弁蓮花文である。うち1点は瓦当裏面に布目痕が観察される。趙由典・南時鎮『月城垓字発掘調査報

- 告書 I』(文化財研究所慶州古蹟発掘調査団 1990年2月)102~103頁、写真111。亀田修一は瓦当裏面に布目痕を有する三国時代瓦を集成し、その製作技法を検討している。亀田修一「韓半島南部地域の瓦当裏面布目軒丸瓦」(『碩晤尹容鎮教授停年退任紀念論叢』 同刊行委員会 1996年12月)。
- (21) 大脇潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」(『研究論集』IX 奈良国立文化財研究所学報第49冊 1991年3月)。
- (22) 鈴木久男は「一本造り」の主要なものを、(1) A技法(筒型成形台包み込み成形)、(2) B技法(粘土紐巻きあげ成形)、(3) C技法(瓦当部内区嵌め込み成形)、(4) D技法(型造り成形)の四つに分類する。このうちB技法とC技法が、瓦当裏面に布目圧痕が見られない技法である。丸瓦痕跡のはずれた所に残る圧痕から、軒丸瓦19は瓦当を土台にして丸瓦が付くと考えられ、C技法である可能性はほとんどない。鈴木久男「一本造り軒丸瓦の再検討」(註17前掲)。
- (23) 井内潔「秦漢軒丸瓦の造瓦技法」(『井内古文化研究室蔵 漢日古瓦図譜』井内古文化研究室 1998年7月)。
- (24) 尹根一「統一新羅時代 瓦当와 製作技法에 관한 研究—雁鴨池出土遺物을 中心으로 —」(檀国大学校碩士学位論文 1977年)。
- (25) 丸瓦の接合時に、瓦当裏面に入れる弧状の溝。花谷浩「飛鳥—奈良時代の軒丸瓦について 法隆寺出土古瓦の調査速報(1)」(『伊珂留我 法隆寺昭和資財帳調査概報』7号 小学館 1987年10月)28頁。
- (26) 花谷浩「飛鳥—奈良時代の軒丸瓦について」(註25前掲)24~25頁。
- (27) 井内功『朝鮮瓦埴図譜V 新羅3』(井内古文化研究所、1977年10月)PL.47~53。
- (28) 「高句麗の半瓦当屋瓦は掛瓦説と「谷巴」瓦説の二説があって、未だにその用途がわからない不思議な屋瓦だが、それに比べて新羅のは瓦当に丸瓦が斜めにとりつくのは半瓦当屋瓦に似ているものの、これらは「谷巴」瓦すなわち谷鏡瓦とみてほば間違いあるまい。新羅の谷鏡瓦には円瓦当形と楕円瓦当形の二形態があって、まず円瓦当形が先行して楕円瓦当形がそれに続くようだ。谷鏡瓦には必ず谷字瓦が対となってあるはずで、渤海の東京城址からは両者がそれぞれ出土しているのに、新羅ではまだ確認されていない」。井内功『朝鮮瓦埴図譜VII』(註6前掲)65頁。
- (29) 江戸時代の「谷瓦」が宇治市平等院鳳凰堂に谷瓦が葺かれている。この谷瓦については、宗教法人平等院ならびに平等院文化財事務所の西村恵祥氏よりご教示、ならびに写真撮影においてご高配を受けた。
- (30) 金誠龜『옛기와』(註7前掲)19頁・『感恩寺発掘調査報告書』(国立慶州文化財研究所 慶州市 1997年3月)160~161頁。
- (31) 藤島亥治郎「朝鮮の出土瓦に就いて」(『夢殿』第18冊 綜合古瓦研究 鶴故郷舎 1938年6月)60頁。
- (32) 濱田耕作・梅原末治『新羅古瓦の研究』(註10前掲)23頁。
- (33) 原田淑人・駒井和愛ほか『東京城』(註3前掲)46~48頁 挿図47・48 図版75。

部文化財管理局 1978年12月)。

- (34) 楕円瓦のもっとも古いものは雁鴨池のそれであろう。加えて雁鴨池=臨海殿の創建時には、軒平瓦・緑釉瓦も採用されており、文様面のみならず瓦屋根全般に対する大きな変革であった。これは言うまでもなく建築様式そのものの革新であったに違いない。『雁鴨池発掘調査報告書』(文化公報部文化財管理局 1978年12月)。

(補註) ひろたコレクションの中の軒平瓦82は顎の厚みが薄く、断面形が三角形をなす。このような例は、顎部範を使用していないと考えてよいだろう。ところがこれと同範の瓦に(註10前掲『新羅古瓦の研究』の636)有文の顎部範を使用している例もあり、興味深い。

表2-1 瓦の概要

番号	大きさ	色調	焼成	同範瓦(文献・遺物番号) 出土地		備考
1	(15.0)	褐灰	硬質		不明	
2	(16.5)	白灰	硬質		不明	
3	(17.0)	白灰	やや軟質		不明	
4	(15.0)	青灰	硬質	C4	芬皇寺址	
5	(14.8)	青灰	硬質	A2234	皇龍寺址	
6	(15.2)	褐灰	硬質	C4	芬皇寺址	
7	(15.4)	青灰	硬質	I113-3?	月城塚字址	
8	(17.2)	灰	硬質		不明	
9	(17.2)	青灰	硬質		不明	穿孔あり
10	(13.2)	灰	硬質	A2291	四天王寺址	
11	(13.6)	白灰	やや軟質	D4	月城址	
12	(13.8)	白灰	軟質	D4	月城址	
13	14.2	赤灰	やや硬質		普門(註記)	
14	—	黄灰	やや軟質	C18	拝里三体石仏	
15	12.3	赤褐	硬質	C21	慶州付近	
16	9.5	青灰	硬質	不明		
17	(11.8)	灰褐	硬質	F103	不明	
18	(11.2)	青灰	硬質	F103	不明	
19	(11.5)	灰	硬質	不明		丸瓦半截成形
20	(15.4)	灰	やや軟質	C43	月城址	
21	(14.6)	黄灰	硬質	A2306	九黄里	
22	(15.2)	褐灰	やや軟質	不明		
23	(15.0)	赤褐	硬質	不明		
24	(14.1)	白灰	硬質	不明		
25	(12.7)	白灰	やや軟質	不明		
26	(19.6)	黄褐	やや硬質	不明		
27	(14.7)	青灰	硬質	A2309	九黄里	
28	12.0	黄灰	硬質	不明		
29	(14.4)	暗灰	硬質	不明		
30	(13.6)	灰	硬質	不明		
31	(10.9)	灰	硬質	不明		
32	(14.6)	黄灰	硬質	D106	九黄里	
33	(14.1)	青灰	硬質	A2367	見谷面	
34	(12.9)	灰	硬質	C87	普門寺址	
35	(14.0)	灰	硬質	D48	皇福寺址	
36	(14.7)	黄灰	硬質	不明		
37	(13.6)	褐灰	やや軟質	D442	石窟庵	
38	(14.9)	白灰	やや軟質	C59	四天王寺址	
39	(21.3)	黄褐	やや硬質	C80	南山長倉址	
40	14.3	黄灰	軟質	C123	三郎寺址	斜方向丸瓦当
41	(14.3)	褐灰	やや硬質	不明		
42	(13.8)	黄灰	硬質	不明		
43	(12.4)	暗赤褐	硬質	不明		
44	13.6	黄褐	硬質	G254	雁鴨池	
45	(14.8)	灰	硬質	G254	雁鴨池	

表 2 - 2 瓦の概要

番号	大きさ	色調	焼成	同範瓦 (文献・遺物番号)	出土地	備考
46	(12.4)	黄褐	硬質	G267	雁鴨池	
47	(12.5)	青灰	硬質	G267	雁鴨池	
48	(15.1)	青灰	硬質		四天王寺 (註記)	
49	(12.6)	黄灰	やや硬質	C208	望徳寺址	
50	(14.6)	灰	硬質	C188	普門寺址	
51	(15.6)	黄灰	硬質	C188	普門寺址	
52	(15.0)	灰	やや軟質	D9	昌林寺址	
53	14.9	灰白	軟質	G338	雁鴨池	
54	14.3	青灰	硬質	D468	皇吾里	
55	(15.6)	黄灰	軟質	D361	千軍里廢寺	
56	(15.0)	灰	やや軟質	D266	臨海殿址	
57	(13.9)	青灰	硬質	G235	雁鴨池	
58	(14.8)	暗灰	硬質	A2278	四天王寺址	
59	(16.8)	灰	硬質	H247-7	皇龍寺址	
60	(13.4)	暗灰	硬質	A2283	九黄里	
61	(13.9)	青灰	硬質	C57	興輪寺址	
62	13.6	青灰	やや硬質	G307	雁鴨池	
63	(14.2)	白灰	軟質	D504	不明	
64	(12.8)	灰	やや軟質	D280	望徳寺址	
65	(14.2)	青灰	硬質	C103	四天王寺址	
66	(14.6)	灰	硬質	J71	葺長寺址	
67	(16.7)	白灰	硬質	D386	皇聖寺址	
68	(16.2)	灰	やや硬質	D386	皇聖寺址	
69	(13.8)	暗灰	軟質	D103	西岳里	
70	(13.0)	褐灰	硬質	H287	皇龍寺址	
71	11.3	灰黒	硬質		不明 (中国)	
72	1.8	灰褐	硬質		東京城 (註記)	平瓦
73	2.8	灰褐	硬質		東京城 (註記)	
74	1.9	灰褐	硬質		不明 (中国)	平瓦
75	5.0	青灰	硬質	C619	四天王寺址	
76	5.2	灰	硬質	C619?	四天王寺址	
77	4.8	白灰	やや軟質	C654	皇龍寺址	顎部施文
78	5.9	灰	硬質	E81	普門寺址	
79	5.6	黄灰	硬質	E81	普門寺址	棟飾平瓦
80	4.8	暗灰	硬質	C509	四天王寺址	顎部施文
81	5.6	灰	硬質	C637	千軍里廢寺	
82	6.9	灰	やや硬質	C636	千軍里廢寺	
83	—	暗灰	やや軟質	E85	臨海殿址	
84	4.6	暗灰	硬質	C630	慶州付近	顎部施文
85	4.4	暗灰	硬質	C510	皇龍寺址	顎部施文
86	4.4	暗赤褐	硬質	C510	皇龍寺址	顎部施文
87	4.3	黄灰	硬質	C547	南潤廢寺	顎部施文
88	5.8	黄灰	硬質	C658	普門寺址	顎部施文
89	6.3	赤褐	硬質	C515	慶州付近	顎部施文
90	4.6	青灰	硬質	C602	南潤廢寺	顎部施文
91	5.9	白灰	やや軟質	A2565	月城址	
92	6.7	青灰	硬質	C524	高仙寺址	
93	5.8	灰	やや軟質	C513	月城址	顎部施文
94	6.2	白灰	硬質	C519	南山長倉址	無文顎部範の痕跡
95	5.9	白灰	やや軟質	E52	慶州市内	
96	5.0	白灰	やや軟質	A2590	慶州	
97	5.7	黄灰	硬質	不明		
98	4.9	黄灰	硬質	C522	南潤廢寺	
99	5.4	白灰	やや軟質	F193	不明	
100	5.3	黄灰	硬質	不明		
101	5.2	白灰	硬質	E55	興輪寺址	
102	6.9(高)29.0(長)	褐灰	硬質		興輪寺址 (註記)	
103	7.3(高)14.3(長)	青灰	硬質	B2811	開城満月台	塼
104	—	灰褐	硬質		不明	

*1 大きさは基本的に軒丸瓦は径、軒平瓦は高さを表す。単位cm () 内は復原値である。

*2 同范瓦の文献記号は以下の通りである。

- A 『朝鮮古蹟図譜 5』(朝鮮總督府 1917年 3月)
- B 『朝鮮古蹟図譜 6』(朝鮮總督府 1918年 3月)
- C 濱田耕作・梅原末治『新羅古瓦の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第13冊 刀江書院 1934年 9月)
- D 井内功『朝鮮瓦埴図譜Ⅳ 新羅 2』(井内古文化研究所 1977年 4月)
- E 井内功『朝鮮瓦埴図譜Ⅴ 新羅 3』(井内古文化研究所 1977年10月)
- F 井内功『朝鮮瓦埴図譜Ⅵ 高麗李朝』(井内古文化研究所 1978年10月)
- G 『雁鴨池発掘調査報告書』(文化公報部文化財管理局 1978年12月)
- H 『皇龍寺 I』(文化財管理局文化財研究所 1984年 4月)
- I 『月城塚字発掘調査報告書 I』(文化財研究所慶州古蹟発掘調査団 1990年 2月)
- J 『特別展 慶州南山』(国立慶州博物館 1995年10月)

参考文献

(註で引用したものならびに表 2 の文献を除く)

- 近藤喬一『瓦からみた平安京』(教育社歴史新書<日本史>40 1985年 3月)
- 坪井利弘『図鑑瓦屋根(改訂版)』(理工学社 1986年 3月)
- 『法隆寺の至宝—昭和資財帳—第15巻 瓦』(小学館 1992年 9月)
- 『木村捷三郎収集瓦図録』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 3月)
- 上原真人『瓦を読む』(歴史発掘⑩ 講談社 1997年 5月)

図版出典

図 1	註 5 文献	図17	註20亀田文献
図 2・3・14・18・20・21	村井伸也撮影	図19	註23文献
図 4～10・16	筆者作成	図22	筆者撮影
図11・15	註10文献	図23	註 3 文献
図12	註11文献	図24	註27文献
図13	註12・13文献		

